

「秋田大学研究者海外支援事業」帰国報告書

2011年3月14日

所属・職名：教育文化学部日本・アジア文化講座 准教授

氏名：高村 竜平

派遣期間：2010年8月16日～2010年12月11日

派遣研究機関名：Tamla Culture Research Institute, Cheju National University

韓国 済州大学校耽羅文化研究所

研究課題：在日済州人の親族関係と家族墓地

○研究概要

報告者は、ここ20年ほどにわたって進行している済州島における葬送・墓制の変化を、研究してきた。これは2000年にはじめて済州島を調査してからの研究課題であるが、これまではマウル（むら）共同墓地の設置と利用について、および墓地管理活動である「伐草」について論文を発表してきた。その延長として、今回はとくに「家族共同墓地」の設置を中心として調査を行った。また、韓国では葬送・墓制の急激な変化がおこっており、その意味でも現時点での調査が必要なテーマである。とくに韓国では2000年代に入って急速に火葬が進展してきているため、今回の調査では火葬化の影響についてもあわせて調査を行った。

一方でこの研究は、現在申請者が歴史学・社会学などの研究者および一般市民をふくめたグループ調査である、在日済州島出身者に対するインタビュー調査に資することも目的としている。この調査では、これまでとくに大阪周辺に在住する済州島出身一世を中心に、生業・社会関係・法的地位の生活への影響などを聞き取ってきた。大阪や東京では戦前から済州島出身者によるコミュニティが形成されてきたが、現在、高齢化した在日一世を死後にどこでどのような形で葬るか、が当人や家族にとって問題となっている。その対策のひとつとして、済州島では90年代以降家族・親族の共同墓地が作られるようになってきた。これは、血縁集団が土地を買収し、家族・親族のみが埋葬可能な墓地とするものである。これにより、在日一世の埋葬地が確保され、その後の墓地管理を故郷の親族が担当することができる。在日する遺族は、墓地の購入費用や管理費用を送金したり、また墓地管理活動に参加したりする。故郷の親族にとっても、自分たちが将来葬られる土地を確保できるという利点がある。韓国では近年墓地に対する面積や設置場所の規制が強まっているからである。以上のような墓地を通じた故郷と日本との関係は、一世の死後おおきな変動が予想される。そのため、現在の状況を記録しておくことは、今後の比較研究のためにも必要である。

今回の研究では、以前から継続して調査を行っている親族集団 A と、今回はじめて紹介を受け調査することになった親族集団 B の墓地管理活動「伐草」にそれぞれ動向調査した。

伐草は旧暦 8 月 1 日を前後して行われる行事で、父系出自によって結ばれた親族集団の特に男性が、集団で土葬墓の土まんじゅうに生えた草を一年に一度刈るというものである。これは単なる墓掃除ではなく、土まんじゅうの形態を維持し、無縁墓ではないということ周囲にアピールするとともに、親族集団の紐帯をつよめるという目的を持っている。集団 A の伐草は、10 年前とほとんど変わることなく行われていた。朝一ヶ所に集合したあと、手分けして分散して設置された墓を巡回して草を刈り、最後に集団の始祖に当たる人物夫婦の墓に全員が集合して作業を終え、その後親族会議を行った。一方、集団 B は 3 年前に分散していた墓を一ヶ所に集中させた。そのため、伐草を一箇所で行うことになり時間を短縮している。その他、集団の男子成員が集まり作業することは集団 A と同様であるが、親族会議はおおむね 60 代以上のメンバーによってのみ行われ、それ以下の成員は草刈り作業を続行していた。集団 A と集団 B にこのような違いが現れる最も大きな要因は、集団 B の宗孫（長男筋をたどった継承者）が日本に在住し、事業に成功してかなりの資金を蓄積したことにある。この宗孫がリーダーシップを取り、墓を一ヶ所に集め家族墓地を形成したのである。このような事例はほかにも事欠かない。集団 A の主要メンバーが在住する村落では、現在 3 つの集団が共同墓地を設置しているが、これらはいずれも日本やソウルを中心として、村落から他出したものが主導して墓地を設置している。

今回あらたに調査した集団 C の場合、もともと分散していた土葬墓をほりおこし、火葬した上で夫婦ひと組づつ遺灰を地下に埋葬した墳墓をあつめた共同墓地を設置した。この墓地設置作業の中心となったのは集団メンバーの内のキリスト教徒であり、火葬と墓地の集約には、キリスト教信仰が影響しているとも考えられる。ただし、集団 C のいちメンバーへのインタビューからは、やはり墓地集約のもっともおおきな動機はメンバーの子孫たちの多くがソウルなど島外に居住していることである、とのことであった。葬法選択および墓の形態は、宗教信仰が決定するとは言えない部分があり、韓国における宗教と葬送の関係については、さらなる検討を要する。またこの集団 C では、墳墓集約の際に火葬に反対する一部のメンバーは、その父の墳墓の移葬に同意せず、そのままの位置で墳墓を維持している。すなわち、現在急速に火葬率が上昇しているといっても、それに抵抗感を感じる人々も当然おり、一直線に進んでいる現象ではないことがわかる。このように、今回の滞在によって新たな課題も発見することができた。

一方、当初予定していた研究課題のほか、行方不明になったり海で死亡したりして遺体がない場合の葬法について、また結婚前の死者の葬法についての事例調査も行うことができた。さらに、このような調査について 2010 年度（財）済州学会研究大会（11 月 19 日）および耽羅文化研究所内部セミナー（12 月 9 日）で発表する機会を得た。このほか、9 月 17-18 日に開催された耽羅文化研究所シンポジウム「他者が見た済州島」および 10 月 8-9 日に開催された（財）済州 4・3 研究所シンポジウム「語りで記録された歴史」に出席し、コメンテーターをつとめた。

○研究期間全般にわたる感想

ほぼ10年ぶりの長期滞在であり、変化の早い韓国の姿を実感することができた。宿泊先は済州大学校のゲストハウスであったが、布団はもとより冷蔵庫や食器など生活に必要な設備を完備したワンルーム式の施設であり、すごしやすかった。また済州大学校では「在日済州島人研究センター」の設置が計画されており、その準備過程もかいまみることができた。さらに、済州島を訪れる研究者と研究にかかわる情報交換の機会を持つことができたのも貴重なものであった。

長期間滞在することで、調査の機会がひろがったのもプラスであった。たとえば、9月半ばに紹介を受けたある在日済州島人から、ある墓を9月末に移葬する予定であると聞き、同行して調査させていただいた。墓の移葬は日程を合わせるのが難しく、なかなか実見することができないだけに、貴重な体験となった。これも、ある程度の期間滞在する予定であったからこそ可能なものであった。

滞在中、朝鮮民主主義共和国による砲撃事件がおこった。報道は事件一色となっていたが、私の在住する済州島は韓国の最南端であり現場からは遠方であったこともあって比較的平穏であったし、ハンバット・円光両大学に留学している学生たちに連絡を取ってみても同様であった（ある学生などは夕方に連絡したにもかかわらず寝ていた）。もちろん、朝鮮戦争以来はじめての地上への攻撃、しかも民間人を含む死者の発生という自体は重大なものであったし、避難訓練がやや大規模にはなった印象があったが、そのことがただちに市民生活に大きく影響するような社会では韓国はすでにないのではないだろうか。もっともそれは、逆に「安保」が日常に定着してしまったことを意味するのかもしれない、かならずしも肯定的に評価できるとは限らないのだが。

最後になったが、研究者として受け入れてくださった済州大学校耽羅文化研究所の許南椿所長（当時）をはじめとする研究所の皆さん（特に安ヘンスンさん）、済州大学校の趙誠倫教授・李チャンイク教授他の教員の皆さん、金昌厚所長をはじめとする済州4・3研究所の皆さん、西帰浦市貌來洞のみなさん、玄善允さん、高光明さん、呉聖洙さんほか数多くの方々のおかげで生活と研究をおこなうことができた。ほんとうにありがとうございました。



村落の共同墓地土饅頭がならぶ村の共同墓地



草刈り作業一族が集まって行われる墓の草刈り



火葬した墓地火葬した一族の墓地